

児童養護施設におけるライフストーリーワークの取り組み —聞き取り調査を通して—

曾 田 里 美

Life Story Work in Child Foster Care Institutions Findings from Interview

Satomi Soda

要 約

本研究の目的は、現在の児童養護施設におけるライフストーリーワーク（以下、LSW）の取り組みを整理し、LSWの実施への手がかりを導き出すことである。そのためにLSWあるいは類似の取り組みを行っている児童養護施設に対して、実施内容や方法に関する聞き取り調査を行った。調査の結果、LSWの実施への手がかりとして以下の7点を得ることができた。LSWの実施にあたっては、①生い立ちを大切に日々の実践が大切であること、②LSWの必要性に関する判断と共通理解が重要であること、③施設全体の取り組みにしていくことが求められること、④入所理由の明確化が必須であること、また、実際のLSWの実施は、⑤多様な職種により実施されており、実施者に応じた実施内容が傾向としてみられること、⑥一つの施設で複数の内容のものが実施されていること、さらに、LSWを通して、⑦過去を整理し理解することにより、将来への見通しがもてるようになることである。

キーワード：ライフストーリーワーク・生い立ちの整理・児童養護施設・聞き取り調査

1. 研究の背景と目的

家族と離れて児童養護施設で暮らす子どもたちにとって、自分が施設で暮らさなければならない理由や家族の状況を理解し、それを受け止めていくことは避けられない課題である。しかしながら、幼い頃に記憶もなく施設入所となっていたり、子

どもに知らせるには過酷との理由から入所理由や家族について聞かれない状態のまま施設生活を送っている子どもが多いのが実情である。こうした状況の中、この課題に取り組む手法としてライフストーリーワーク（以下、LSW）が近年注目されている。LSWは子どもが過去に起こった出

来事や家族のことを理解し、自身の生い立ちやそれに対する感情を信頼できる大人とともに整理する一連の作業である。2012年3月に国が出した「児童養護施設運営指針」にも、子どもの発達に応じて生い立ちや家族の状況について適切に知らせていくことが示された。LSW への関心が高まり、実施に力を入れていくことが求められるようになったといえる。

しかし、LSW の取り組みのほうはなかなか進展していないのが実情である。2012年に児童養護施設を対象とした実態調査（アンケート調査）によると、類似の取り組みを含め LSW を実施している施設は約2割と少なかった。また、これらの施設における LSW の実施のしかたは、約7割が「一部の職員（職種）が必要に応じて実施する」という形態をとっていた。LSW の実施はまだ進んでおらず、必要性を感じた一部の職員や職種による取り組みが始まった段階にあるといえる¹⁾。一方、「LSW のような取り組みは必要」と回答のあった施設は多く、アンケートの自由記述欄には「これから LSW のことを勉強していきたい」、「LSW を実施している施設の様子を知りたい」といった意見が多数みられた。現状として必要性を感じながらも、それを実践に結びつけることの難しさが窺われた。

LSW の実施内容として実態調査では、ライフストーリーブックや振り返りシート等を用いた生い立ちの整理、子どもとのアルバムや年表づくり、生い立ちを扱った心理面接など様々なものがみられた。LSW の内容・方法については明確な「設計図」はなく、対象となる子どもに応じて行うもの²⁾とされている。一般的には、子どもと一緒に記憶や記録を整理していく過程において、成果物として写真や各種証明書を貼付したり、子どもの生育歴や移動歴を記入したりしていくライフス

トーリーブック等を作成する場合が多い³⁾。実態調査にみる取り組みの様態から、それぞれの施設が LSW と考えて実践しているものにはかなり違いがあることが窺われる。

そこで、本研究では現在 LSW あるいは類似の取り組みを行っている施設での実践を明らかにし、そこから児童養護施設における LSW の実施の手がかりを導き出すことを目的とする。先駆的、現実的な実践からのヒントは、日本の児童養護施設の実情に即した LSW の推進に貢献できると考える。

2. 研究方法

1) 調査方法と対象

方法は半構造化面接による実践内容の聞き取りである。対象は前述の実態調査の結果に基づいて選定した。選考基準は、① LSW の実施状況を尋ねる項目で、「主体的に LSW を現在実施している」もしくは「主体的に類似のものを現在実施している」（なおかつ、類似のものについて具体的内容が記載されている）に回答している、②次年度の本研究の聞き取り調査に協力すると回答しているという2点である。なお、①の「主体的に実施」とは、児童相談所に協力する形ではなく、施設が主体的に LSW に取り組んでいることを意味する。

なお、この実態調査における LSW の定義については、「ライフストーリーワークは、子どもが、過去に起こった出来事や家族のことを理解し、信頼できる大人とともに自身の生い立ちやそれに対する感情を整理する一連の作業を示します。英国では、社会的養護のもとで暮らす子どもたちに対して広く実施されています」と記した。先行研究より、LSW を実施している児童養護施設は少ないと思われたため、類似の取り組みを含めた実施

状況を把握できるように LSW に関する説明は簡略にした。よって、本研究における LSW も子どもの生い立ちを扱う幅広い内容まで含めて考える。

調査対象は上記の選定条件を満たし、聞き取り調査の了解が得られた児童養護施設 8 か所である。聞き取り調査での対応は、各施設で LSW を主に実施している人に依頼した。調査協力者の属性は表 1 のとおりである。

表 1. 調査協力者の属性

	地 域	職 種
A	北海道・東北	施設長
B	関東	施設長
C	中国・四国	施設長
D	近畿	心理療法担当職員
E	九州・沖縄	保育士（生活担当職員）
F	関東	保育士他（生活担当職員） 心理療法担当職員
G	関東	心理療法担当職員
H	九州・沖縄	心理療法担当職員 家庭支援専門相談員

2) 実施方法

聞き取り調査は、筆者がそれぞれの施設に訪問して行った。調査期間は 2012 年 9 月から 11 月、平均時間は 1 時間 19 分であった。主な質問内容は、「実際に行っている LSW（類似のものを含む）の内容とその実施方法」、「LSW を行ううえでの課題」とした。加えて、LSW の中で用いるツールや作成物等がある場合は可能な範囲でそれらの様式等を入手させていただいた。インタビュー内容は、調査協力者の了解のもと IC レコーダーに録音し、逐語記録を作成して整理した。施設ごとに取り組み内容を整理した段階で、各施設の調査協力者に記載内容や表現等に関する確認を依頼し、指摘のあった箇所について検討、修正を行った。

3) 倫理的配慮

調査協力者に対して本研究の趣旨と方法、研究

倫理遵守事項について記した調査協力依頼文を送付し、インタビュー当日に口頭で説明を加えたうえで、研究協力への同意・承諾を得た。また、IC レコーダーへの録音について許可を得て実施した。

4) 分析方法

インタビュー内容から施設ごとに LSW の取り組みを整理した。そこから①主な実施者と実施内容（誰がどのように実施しているのか）、②取り組み方（一部の職員や職種によるものか、施設全体によるものか）に着目して整理を行った。

3. 結果

表 2 は児童養護施設ごとに LSW の取り組みをまとめたものである。インタビューの質問項目である LSW の実施方法・内容（実施者、開始時期、取り組みの内容）と実施するうえでの課題をインタビューでの語りから整理した。さらに、表 3 ではこれらの実践の類似点をまとめ、8 施設の取り組みからみえてくる傾向として整理した。

表2 各児童養護施設におけるLSWの取り組み

	実施内容	課題
A 施設	<p><実施者>施設長 子どもに聞いたうえで生活担当職員が同席する場合もある。</p> <p><開始時期>2011年から</p> <p>●幼児～小学生 子どもから自分の生い立ちや家族について聞いてきたときには、「私たち（職員）が知っていることは話すよ」という姿勢で、どこまで伝えるか（ゴール）、伝え方等を職員間で検討して子どもに少しずつ話していく。必要に応じて、子どもと一緒にジェノグラムやアルバムを作成。</p> <p>●中高生 進学や就職の面接練習の中に生い立ちや家族の話を織り交ぜる。志望理由を考えるのと同じように、施設にいることや保護者のこと（保護者欄が園長名になっている）をどのように先方に説明するのか一緒に考える。まずは、子どもが面接でどう話すのかを聞いてから、言い方等について一緒に考えていく。子どもが学校からもらってきた面接用のテキスト本などを活用。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 施設長だけでなく、職員誰もが実施できるようにしていく。そのために職員の力量を高めることが必要。 子どもの「知りたい」、「聞きたい」という要望に応じて話すという姿勢が、結果的に聞かないまま退所する子どもをつくっている。自分から言っていない子どものニーズの把握と対応。 子どもに伝えるための情報の不足。児童相談所の理解を得るのが難しい。
B 施設	<p><実施者>主に施設長 施設長が生活担当職員や家庭支援専門相談員と協力しながら実施。</p> <p>施設内で他職種が同席または児童相談所が告知をして施設側が同席するなど様々な形態で実施。</p> <p><開始時期>2009年から</p> <p>●小3～小6 対象は2、3歳で入所して入所理由や親の状況が分からない子ども。子どもが言語化してきたことを受けて、施設内あるいは児童相談所と協議しながら子どもに伝えていく。特に最近では児童相談所と細かく協議し、告知内容を決め、シュミレーションして段階的に実施。2、3年かけて子どもの様子を見ながら少しずつ行っている。</p> <p>●退所前（高校3年生） 高3で退所前の児童全員に対して一人ずつ生い立ちの確認、整理を行う。入所理由、入所から現在までを振り返って成長したところ、これから頑張りたいことなど話す。ある程度家族の状況についても伝える。一人につき1回で1時間くらい。1回で終わるため、アフターケアの場面、あるいは10年～20年後に子どもから家族の話などが出てくることもある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> アセスメントを十分に行い、本当にその子にとってLSWが必要なのかを見極める専門性の確保。質の高い養育を行う職員の育成。 LSWに参加する子ども、実施者、子どもの生活担当職員を支えていく施設の体制の整備。
C 施設	<p><実施者>施設長 子どもとの関係性の中で実施。</p> <p>どのように実施しているかは他の職員と共有している。</p> <p><開始時期>30年以上前から</p> <p>対象は、親が分からないなど生い立ちに空白部分を持っている子ども。特に最近（2年前から）は、誕生後の生い立ちだけではなく、誕生前の命の生い立ちに重点をおいている。誕生前の命の生い立ちの話の主旨は、「この私」（実施者）。この私がどのように生まれてきたかという話。実施者との関係性が深ければ、子どもは興味を持って聞き、「自分の話」に置き換えて考えられる。私の命もあなたの命も選ばれた奇跡の命であることを示し、その命を生かして自分らしく生きることの大切さを伝える。誕生前、誕生後を含めた生い立ちの話をし、それを子どもたちが整理していく過程については、何年もかけて実施者が見守り、付き合っていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 施設の子どもにとって生い立ちの問題は大事だが、その大事なところへ職員が力を注いでいけるためにも、人的、時間的余裕が必要。 LSWは誰でもマニュアルがあればできるというものではない。前提として子どもとの関係性、事実を伝えた後に子どもがそれを整理し深めていくのに付き合える力量と覚悟が必要。

	実施内容	課題
D 施設	<p><実 施 者>心理療法担当職員 実施の際の生活担当職員等の同席はない。</p> <p><開始時期>2010年から 実施したのは1 ケース</p> <p><導入> 心理療法の中で、心理療法担当職員が「生い立ちの整理」が必要と感じた子どもに対して実施している。実施にあたっては生活担当職員に必要性を説明して理解を得る。また、開始にあたっては児童相談所に実施について相談する。</p> <p><LSW で扱った内容> 入所理由の確認、家庭や施設におけるこれまでの生活の整理。その中で、親族のお墓のある場所を知りたい、以前住んでいた家を見に行きたい等の要望が子どもから出てくる。出てきた要望に対して、どこまでどのように応えていくか、生活担当職員と協議しながら進める。</p> <p><使用するツール> ライフストーリーブック（才村眞理 編『生まれた家族から離れて暮らす子どもたちのためのライフストーリーブック』）を使用。その子に合った目次を作り、ブックから必要な項目を選択して実施者がパソコンで作り直し、ファイリングする</p>	<ul style="list-style-type: none"> 生活担当職員との連携（LSW についての共通認識）。子どもは LSW を行う中で「〇〇を知りたい」「〇〇を見に行きたい」という要望が出てくる。それを伝えたり、見に行ったりすることに対する生活担当職員の戸惑いは大きい。実施者と生活担当職員が LSW について共通認識を持ち、連携を図ることが必要。 施設全体の取り組みへ。子どもの「知りたい」という気持ちを吸い上げ、答えていく（LSW に繋げていく）仕組みが必要。 スーパービジョン、実施者のつながり。
E 施設	<p><実 施 者>生活担当職員（1 名） 自分の担当するグループホームの子どもに対して実施。 ケースによっては心理療法担当職員が同席。</p> <p><開始時期>2009年から</p> <p><対象> 最初是中3 の子どもに対し、進路を考えるにあたって自分の生い立ちを振り返るために実施。中3 では進路決定や受験に間に合わないため、少しずつ時期を早めている。また、問題行動を起こした子に対して、「そういうことをしてしまったきっかけを探るため、また自分を変えるためにも過去を振り返ってみよう」と投げかけて実施。</p> <p><内容> 子どもにノートを1冊渡して、自身の生い立ちについて箇条書きで書き出してもらう。書き出したものを基に子どもと話しをする。その内容を実施者がパソコンで文章にまとめる。次回に子どもは実施者が文章化したものを読み、それに追加や修正をしていく。それを実施者が次回までに文章化して……という作業を繰り返し、子どもの生い立ち（ストーリー）を完成させていく。</p>	<p><u>施設全体の取り組みへ</u> 取り組みを広げていくために必要なこと</p> <ul style="list-style-type: none"> LSW の必要性に対する職員の理解。 施設内での LSW のアドバイザー的存在。 <p>LSW は子どもとの信頼関係が築かれていないとできない。生活担当職員が日常生活の中で子どもが自分の過去や家族について話せるような雰囲気作り（種まき）を含めて、LSW を行う。LSW の中で、アドバイザーが子どもが書き出した生い立ちや、文章化されたものを見ながら、実施者にアドバイスしていくような仕組みづくり。</p>
F 施設	<p><実 施 者>各生活担当職員 各生活担当職員が自分の担当する子どもに対して実施 心理療法担当職員</p> <p><開始時期>2007年から</p> <p>●幼児（年長）から児童自立支援計画を生活担当職員と子どもと一緒に作成。</p> <p>その中で、入所理由を子どもと確認していく。子どもが異なる認識をしていれば修正する。生い立ちについて他に知りたいことがあれば、児童相談所に尋ねて、後日フィードバックする。</p> <p>また、課題と目標も子どもと一緒に考え、前回の目標の達成度についても話し合う。</p> <p>●子どもがこれまで知らない事実を伝える場合や家族再統合に向けて生い立ちの整理等が必要な場合は、児童相談所と協議しながら、段取りを組んで進める。</p> <p>●心理療法の中で、子どもとの年表作りなど生い立ちの整理に関わる作業を実施（児童や生活担当職員の要望に応じて）</p>	<ul style="list-style-type: none"> （交流があり可能な場合は）保護者を含めた自立支援計画の作成。 発達に問題を抱えた子どもへの実施。 <p>子どもに分かるように伝えるための表現力、言語力。</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもとの信頼関係の構築、維持。子どもとの自立支援計画の作成は、信頼関係の構築が前提となる。子どもの年齢（思春期の子）や状態によっては関係性を構築、維持していくのが難しい面もある。

	実施内容	課題
G 施設	<p><実 施 者>心理療法担当職員 子どもの生活担当職員が必要なときや参加できるときに同席。</p> <p><開始時期>2007年から（前担当者から引き継いで実施）</p> <p>●入所1ヶ月後の聞き取り 入所児全員に対して、心理療法担当職員と生活担当職員が実施。入所前の生活、入所理由、入所の目安（どれくらいここにいるのか）などを子どもと話しをする。子どもは、どうして施設にきたのか、何のために施設にいるのかを理解し、見通しをもって生活することができる。</p> <p>●生い立ちの整理 個々の子どもの状況（問題性、退所前という時期）や子どもからの希望などに基づき実施。スケッチブックを活用した生い立ちのノート（オリジナル）づくりを通して、入所前の生活や家族との関わり、施設での生活などを一緒に振り返り整理していく。子どもに応じてジェノグラムや年表を作ったり、ゆかりの場所を訪れたりする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・LSW に関する知識不足→理論等の勉強の必要性。 ・LSW のやり方が確立されていないことによる実施の不安。 他の施設ではどのように実施しているか等の情報がない。 ・施設内の心理療法担当職員（常勤1人、非常勤3人）のLSW の必要性や捉え方に関する共通理解。 ・実施にあたって生活担当職員との日程調整。
H 施設	<p><実 施 者>主に心理療法担当職員・家庭支援専門相談員</p> <p><開始時期>2005年から</p> <p>●思い出や成長の記録の作成（生活担当職員） 生活場面でのアルバムづくり・卒園生を送る会でのメモリアルスナップ</p> <p>●人生ふりかえりシートの作成（心理療法担当職員） 心理療法で関わっている子どもの中で、退所前に生い立ちの整理が必要な子どもを対象。心理療法の時間に人生ふりかえりシートを子どもと一緒に作成。シートは3種類。「誕生からここまで大きくなりました記録表」（成長の記録と思い出）、「プチ内観プリント」（これまでお世話になった人について）、「私の人生25年計画」（退所後の将来設計）。過去を整理し、将来の見通しを立てることを試みる。現在は虐待を受けた子どもにも適用。</p> <p>●子どもが知らされていない事実の告知（家庭支援専門相談員） 子どもからの入所理由や家族について「知りたい」という要望に応じて、家庭支援専門相談員が告知に向けて家族や児童相談所との調整を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人生ふりかえりシートについては、心理療法で関わり、親との関係等から必要性を感じている子どもにのみ実施している。すべての子どもを対象として取り組んでいきたい。そのための人と時間の確保が必要。

表3 各施設の取り組みのまとめ

実施者	施設長	心理療法担当職員		生活担当職員	
施設内他職種の協働	生活担当職員の同席	・生活担当職員の同席 ・他職種との役割分担	同席等なし	各生活担当職員による実施	心理療法担当職員の同席（最近）
主な実施内容	子どもが知らない（知らされていない）事実を伝える	ライフストーリーブックや振り返りシートを使った生い立ちの整理		子どもと一緒に児童自立計画の作成	生い立ちの文章化による整理
取り組み方	施設全体の取り組み	施設全体の取り組み	一部の職員による取り組み	施設全体の取り組み	一部の職員による取り組み
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・施設長以外の実施者、職員の育成 ・実施を可能とする職員体制、支援体制 ・児童相談所との連携（情報収集） 	<ul style="list-style-type: none"> ・実施方法の確立 ・他施設とのつながり、情報交換 ・生活担当職員との日程等の調整 ・対象児童の拡大 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員間の共通理解、共通認識 ・施設全体の取り組み ・スーパービジョン ・他施設とのつながり、情報交換 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者を含めた実施 ・思春期、発達障害の子どもへの実施 ・子どもとの信頼関係の構築、維持 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員間の共通理解、共通認識 ・施設全体の取り組み

表3にあるように、LSWの実施者は、主に施設長、心理療法担当職員、生活担当職員の3職種に分かれており、実施者によって実施内容に違いがみられた。例えば、施設長が実施する場合は、「子どもが知らない（知らされていない）事実を伝える」という内容であった。ただし、子どもに伝えるための準備や方法には、それぞれの実施者の経験や実践に基づいた創意や工夫がみられた。心理療法担当職員が実施しているところでは、心理療法場面でライフストーリーブック等を使った生い立ちの整理が主に行われていた。また、児童の生活担当職員が実施しているところは、担当児童とのこれまでの関わりの中で生い立ちの確認や整理が取り入れられていた。

LSWの取り組み方は、「施設全体の取り組み」と「一部の職員による取り組み」に分かれた。「一部の職員による取り組み」のところは、実施するうえでの課題として、職員間でLSWに関する共通理解・共通認識を図ること、施設全体の取り組みにしていくことが挙げられた。「施設全体の取り組み」となっているところは、LSWの実施に際して施設内の他職種による協働がみられた。協働の中身は、LSWを実施する際他職種の同席、LSWの準備や過程における職員間での協議、他職種との役割分担等である。その協働の中で一番多かったのはLSWへの他職種の同席であった。施設長あるいは心理療法担当職員が実施する際に生活担当職員がそこに同席するという方法である。児童養護施設においてLSWを実施していくためには、これを施設全体の取り組みとしていくことが一つの課題であり、それに対しては実施の際に生活担当職員が同席するというような工夫が必要であることが示された。

4. 考察

8か所の児童養護施設へのインタビュー内容の結果から、児童養護施設におけるLSW実施のポイントを各施設の実践例を挙げながら示していく。なお（ ）は表2に示した施設標記を表す。

1) 生い立ちを大切に日々の実践

村瀬（2012）は「子どもの生に纏わる重要な事実を分かち合っていくための対話、事実を受け止めていく行為、とは、施設における日々の営みを基盤としてこそ、可能になる」⁴⁾と述べる中で、卒園時にゆかりのある人による回想と励ましの言葉を入れたビデオ（自分史でもある）を子どもに贈っている施設の実践を紹介している。LSWの一環としてこれに似た取り組みをインタビューの中で聞くことができた。生活担当職員が子どものアルバムを丁寧に作り、子どもがいつでもそれを開いてみたり、職員と一緒に語ったりできるようにしていたり、退所時に子どもの成長や思い出の記録をメモリアルスナップ（コメント付きの動画）にして子どもに示すという取り組みである（H）。この施設では生い立ちに葛藤を抱えている子どもが多く、そこをどのように扱っていくかを考える中で、最初に行きついたのがアルバム作りだという。

このような日常生活の中で子どもの生い立ちを大切に扱う風土がLSWの実施に繋がり、そのような取り組みそのものをLSWの一部と捉えることができるだろう。

2) LSWの必要性に関する判断と共通理解

英国では社会的養護の子どもたちが自身の措置に関する話し合いに参画するために、自分に纏わる事実を理解しておくことは前提という考えに基づいてLSWが実施されている^{5) 6)}。自身の生い立ちに空白部分や混乱（例えば里親のことを実親と思い込んでいる等）のある者には特に必要なも

のといえる。施設ではこれらの理由により職員側が（この子にとって）LSW が必要であると考え、子どもから過去や家族について「知りたい」というニーズを表明する者に対して LSW が行われていた。子どもからのニーズは素直に「知りたい」と言語化する場合もあれば、それが問題行動として表れる場合もある。

LSW 実施の判断については、どの施設も施設内あるいは児童相談所を交えて慎重に協議されていた。また、どこまでの情報をどのように子どもに伝えていくかについても実施者のみの判断ではなく相談しながら進められていた。特に B 施設では LSW の実施に当たり、今この子にとって本当に LSW が必要なのか、子どもの成育歴や家族歴はしっかりおさえているか、子どもと職員の信頼関係は十分に構築されているか、子どもが辛い事実を知って揺れたり不安定になったときのフォロー体制は整っているか等、徹底したアセスメントが行われていた。そこに至るまでには LSW に取り組んだ子どもが動揺し、それが大きな問題行動に繋がり、施設で継続して支援していくことが困難になったという苦い経験がある。「子どもにとってよかれと思ってやったことが、見捨てられ体験の再現となってしまう」(B) ことのないよう LSW の必要性の判断、施設内および関係機関を含め共通理解を図って臨むことが重要といえる。

3) 施設全体の取り組みへ

LSW を特定の職員（職種）が実施している場合は、これを施設全体の取り組みに広げていくことの難しさが窺われた (D, E)。D 施設では心理療法担当職員が LSW（ライフストーリーブックを用いた生い立ちの整理）を行っているが、子どもは LSW の中で出し切れなかった思い（例えば、昔住んでいた家を見に行きたい等）を生活場面で

出している。しかし、このような子どもの「知りたい」、「見に行きたい」という新たな要望に対する生活担当職員の戸惑いは大きいようである。そこには新たな事実を知ることによって子どもがショックを受け、不安定化することへの懸念がある。同じ施設で実施者と生活担当職員の間で LSW に対する考えや態度に違いがあると、子どもは混乱してしまうだろう。LSW の導入や実施にあたり LSW について施設内で共通理解・共通認識が図られていても、それを維持していくことの難しさが窺われる。子どもが生活場面で「過去や家族について知りたい」という思い表すことができ、そのようなニーズを職員がしっかり受け止め、対応 (LSW に繋ぐ等) していけるように、LSW を施設全体の取り組みとして浸透させていくことが重要である。

インタビューでは、他施設の実践から施設全体の取り組みにしていくためのヒントも得られた。例えば、施設長が主な実施者の施設では、子どもが知らない（知らされていない）事実を伝えるにあたって、どのタイミングでどこまでの情報をどのように伝えていくかについて職員間で協議しながら慎重に進めていた (A, B, C)。また、施設長や心理療法担当職員が実施者の場合は、LSW を実施する際に生活担当職員が同席するという方法がとられていた (A, B, G)。生活担当職員の同席については、子どもが安心して LSW に取り組むため、また生活担当職員との愛着形成を促すために有効と考えられている⁷⁾。実際、インタビューの中でも生活担当職員が LSW に同席することによって、子どもの生い立ちやそれに対する感情を共有でき、子どもへの理解と信頼関係の構築につながっていることが語られた (G)。

4) 入所理由の明確化

子どもは入所時に年齢に応じて入所理由等につ

いて説明を受けていても、「知らない間にここ（施設）に来た」「どうしてここで生活しているのか分からない」と感じていることを現場では痛感されていた（D、F、G）。LSWの中で子どもと入所理由や入所経緯について確認、修正、共有することは必須であり、年齢に応じてこれらの作業を繰り返すことが必要といえる。F施設では子どもと自立支援計画を立てる際、毎回入所理由の確認、追加の説明等を行っている。G施設では「入所1か月後の聞き取り」の中で子どもが入所をどのように捉えているか確認している。また、D施設では、LSWの中で入所理由の明確化ということを意識的に行うことにより、児童相談所や施設における入所時の子どもへの説明がより丁寧になり、さらには伝えたときの内容や伝え方を詳細に文書で残すようになったという変化がみられている。

5) 多様な職種による実施・実施者に応じた内容

LSWの実施者は一般的に児童相談所の児童福祉司や児童心理司、施設の職員、里親委託児童であれば里親などがあげられる。本研究では児童養護施設が主体的にLSWを進めている施設を対象としたため、実施者は当然施設の職員であった。その中で主な実施者は施設長、心理療法担当職員、児童の生活担当職員（児童指導員、保育士）に分かれた。そして、実施者によってLSWの内容に違いがあることが傾向としてみられた。

LSWの実施者には子どもとのワークの時間の確保、子どもへの共感性、ワークへの覚悟が必要とされる⁸⁾。前述の実態調査の分析からは、「実施者の資質や力量」として子どもの生を肯定的に伝えること、子どもの生い立ちの個別性を尊重すること、社会的養護の子どもを理解していること、子どもとの信頼関係が構築されていることが抽出された⁹⁾。特に子どもとの信頼関係については施設職員であれば日々の子どもとの関わりの中で培わ

れている要素といえるだろう。児童相談所の児童福祉司や児童心理司がLSWを行うとなれば、実施前に子どもとの関係づくりに丁寧な時間をかけることが必要となる。

誰（どの職種）がLSWを行うかは、実施する者の経験、施設での立場や子どもとの関わり方、子どもとの関係性などによって決まってくるだろう。施設には様々な立場の職員が存在することから、多様な職種によるLSW実施の可能性があること、その実施者に応じた実施内容がみられることは、施設でLSWを実施するうえでの強みと捉えることができる。

6) 一施設における複数の実施内容

インタビューから一つの施設が複数の内容に取り組んでいることが分かった（A、B、F、G、H）。例えばA施設は子どもの年齢に応じて内容を変えている。幼児から小学生には子どもの生い立ちや家族について少しずつ伝えていき、中学生には進学や就職の面接練習の中に生い立ちや家族の話を織り交ぜるという方法がとられている。どちらも子どもからの要望に応じて必要性を検討しながら行っている。他には入所児童全員を対象に実施するものと、必要な子どもに対して実施するものを分けている施設があった。B施設では、退所前の子ども全員に対して生い立ちや施設での生活の振り返りを行い、小学生には必要性に応じてこれまで知らない（知らされていない）事実の告知を行っている。一方、G施設では全員を対象に行うものを入所直後に設定している。「入所1か月後の聞き取り」として全員に入所前の生活や入所理由、入所の目安等について話す時間を持ち、必要な子どもには個々の状況に応じて生い立ちの整理を行っている。また、生活担当職員、心理療法担当職員、家庭支援専門相談員が役割分担しながら、それぞれが子どもの「生い立ち」の問題に関わる

という取り組み方（H）もあった。

LSW は入所児全員に行うものなのか、それとも必要な子どもに対して行うものなのか議論されることは多い。生い立ちの問題は児童養護施設では避けられない固有の問題である。そしてその問題は子どものニーズや状況によって違いがあることを考慮すれば、複数の内容を合わせ持つことは理想といえるだろう。しかし、上記の施設は最初から複数の内容を実施していたのではなく、一つの取り組みから必要に応じて、もう一つの取り組みが生み出されていた。

7) 将来について考える前に過去の整理を

子どもと自立支援計画を作成している F 施設では、入所理由を丁寧に確認することによって、それまで自身の課題や目標を立てられなかった子どもが、積極的に考えられるようになったという。また、退所に向けて子どもと一緒に「将来設計シート」を作成している H 施設では、はじめにそのシートを作成できなかった子どもたちが、過去を振り返るためのシート作成を先に取り組むことによって、将来についても考えられるようになったという。子どもたちが、現在の生活の目標や将来の見通しを立てられないという事実と直面し、実施者がそれを克服するために過去の整理の重要性に気付いたという実践例である。言い換えれば、過去を整理して受け入れることができれば、見通しを立てて前向きに生活することが可能になるといえるだろう。LSW は子どもが自身の過去を受け入れ、未来に向かって生きていくことを支援するものである。さらに C 施設では、子どもが生まれた後の生い立ちだけでなく、誕生前の命の生い立ちについて話すことによって、かけがえのない命を大切にしてほしいというメッセージを伝えている¹⁰⁾。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究では LSW に関する実践や研究が数少ない中で、現時点での児童養護施設における取り組みを整理することによって、LSW 実践の実情を知るとともに、そこから実施への手がかりを得ることができた。しかし、8 施設の実践を児童養護施設における取り組みとして一般化することには限界がある。児童養護施設に入所している子どもへの LSW は、児童相談所の児童福祉司あるいは児童心理司が中心となり、児童養護施設がそれに協力するという形での実施もある。様々な形態での実施のしかた、それらの比較等を通してさらに児童養護施設における LSW の実情の把握、推進への検討を深めていきたい。

付記

調査にご協力いただきました児童養護施設の方々に感謝いたします。

なお、本研究は、平成22～24年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））「児童養護施設におけるライフストーリーワーク実践に関する基礎的研究」の一部です。

注および文献

- 1) 曾田里美：児童養護施設におけるライフストーリーワークの実態—アンケート調査の分析から—，神戸女子大学健康福祉学研究，第5巻，35－48，(2013)
- 2) Ryan,T, Walker,R：Life story work：A practical guide to helping children understand their past, BAAF, (2007)（＝才村眞理，浅野恭子他監訳：生まれた家族から離れて暮らす子どもたちのためのライフストーリーワーク実践ガイドブック，福村出版，p17，2010）
- 3) 徳永祥子：非行臨床におけるライフストーリーワークの実践について，子どもの虐待とネグレクト（13）

47-54, (2011)

- 4) 村瀬嘉代子：子どもの生に纏わる根幹の事実を分かちあう（伝える），児童養護，43（3），30-33，（2012）
- 5) 前掲2）（=2010：13）
- 6) 榎原真也：児童養護施設におけるライフストーリーワーク—子どもの歴史を繋ぎ，自己物語を紡いでいくための援助技法—，大正大学大学院研究論集，第34号，258-267，（2010）
- 7) 前掲6）
- 8) 前掲2）（=2010：17）
- 9) 前掲1）
- 10) 杉山洋：家族のつながりが見えない子らに～生命の尊さを伝えたい～，児童養護，43（2），20-23，（2012）